

# 芒種



能村登四郎

朴咲けり

不壊の宝珠の

朴咲けり

裏返る

さびしさ

海月くり返す

『芒種』とは二十四気の一つで六月六日のこと。「のき」のある穀物を播く時期ということ。で何となく好きなことはないのでつけた。(あとがき)

駘

蕩

平成七年

山深く輪飾のある泉かな

手毬唄むかし戦に勝ちしとふ

極寒に兄を葬るやこれも順

白息のかく乏しくてかく生きて

病むと聞き死と聞き寒の身の内外

いまさらと思ひてゐしが厄詣

梟声上手に真似る顔さびし

河豚出でて一座次第にしづかになる

水洩を感じてよりの強気失せ

つられ咳して気まづさの車中かな

倅  
せ  
の  
類  
型  
の  
中  
毛  
糸  
編  
む

初  
訝  
し  
て  
松  
山  
は  
浅  
か  
ら  
ず



水近く住みて春くる霽知れり

猫と猫恋なきごとくすれ違ふ

板前の皆まで抜かぬ独活のあく

春寒の太宰府遅れ鸞うそを買ふ

+

柎挿す  
榎目正し  
き門柱

八や十そ粒つぶ  
といふ年の豆如何にせむ

紅梅をなほ濃くしたる雨後の靄

春浅き水音めぐる都府楼址

宗像大社二月も青き楠立てり

玄海の辺津宮として梅さかり

ねんねこの嬰の首見えず戻りけり

遠き日の違約の記憶探梅行

庭の辺の初のみどりや露の臺

十五

萩寺より根分の知らせ電話にて

巷ゆく酔歌は卒業生とみし

初蝶のまろ転ぶごとくる風の中



八荒の雲とも見えて比良の方

雨戸半分明けての店や鮎いさざ売る

美しき老いとはあるや忘れ霜

啓蟄の土中の深さ思ひけり

喪つづきの行けば末黒野芒原

まつしぐらなる初蝶の我に来よ

穴出でし蟻あたらしき艶走る

きのふより狭まる道や桑解かれ

傾ぎ癖知りたる雛を飾りけり

拾ひてはしばし訝る雛の  
纓えい

薄紙の音さわさわと雛納め

あつものに鞠まり駄ふのうかぶ雛の日

耳の日や耳すこやかも不倖ふしあはせ

世の怖れひとつふやして蛇出づる

鳥雲に入るほど遙か明治の世

木々芽吹き村道斑ら乾きして



春彼岸酔蓮の  
コツに母泛ぶ

春暁やもし  
声出さば濡  
れてゐむ

まんさくや奥領の雪の全きに

栗して仏すがたの蕨かな

逃げ水の中に真紅の一車消え

辛夷散り白の狼藉尽しけり

波多野完治さん

老人の性の書の出で麗なり

ふと齡忘れてゐたり接木して

麗とは老いに眩しきものならし

いぶかしや遍路の群におのれ見て

仕立たる遍路装束眼に痛し

野をしばし彼の世のさまに遍路ゆく

最少の繕ひ出来て築番屋

築組みに老の助つ人来りけり

粽解く笹裏濡れてゐたりけり

ジーンパンに詰め込む死体青き踏む



花  
夕  
べ  
堅  
田  
蜷  
と  
い  
ふ  
貫  
ふ

日  
向  
臭  
さ  
と  
い  
ふ  
贅  
沢  
な  
匂  
ひ  
か  
な

夜の雨に満を持したるさくらかな

春愁をひらりと躲し鰻食ふ

花疲れ生きの疲れもあるらしき

東京をふるさとにもち春惜しむ

同齡の少なくなりし独活を食<sup>は</sup>む

後手を組んで撮らるる暮春かな

倅にさびしさ搦む残花かな

師のごとく正座して春惜しみけり

小さくて飯蛸をとる壺といふ

充分に寝足りし山の機嫌かな

辛夷の空光りの鈍き日の通る

卒業の娘や着くづれの時に見る

世に柔しき男が殖えて麗なり

糴<sup>せり</sup>の字をやうやく覚え菜種河豚



初音きききとめ長耳の羅漢かな

春暁や降らぬ筈なる庇濡れ

花疲れとてみづからに言ひ聞かす

沖波の生れては消ゆる鯉季

応声教院

沙羅双樹慈眼に細花蒼もつ

童仏十万睦ぶ著莪の花

二番茶に間ある茶山の縞模様

百千の牡丹を見たる酔ひごこち

日輪は宙に小さし黒牡丹

梅雨の夜の道の段差を熟知せり

それらしき色となりたる梅筵

更衣妻の姿見遣りけり

水  
平  
線  
弓  
形  
な  
せ  
り  
岩  
燕

明  
易  
き  
沖  
を  
目  
指  
し  
て  
白  
魚  
舟

蚊帳なき世蚊帳吊草の残りけり

夕町に磯の香のこる小鯨賣



水<sup>みづ</sup>鱧<sup>はも</sup> やうつはは魯山人好み

かけもちに落着かぬ座の鱧胡瓜

甘き匂ひ残して消えし雨蛙

藻の色のきのふに変わる一雨後

柚の花や夜は月ありと信じたく

湖神の茅の輪くぐるも旅にして

裏返るさびしさ海月くり返す

思はざる深きまで刈る藻刈鎌

水着着て肌のよるこび息づける

兜虫返しても捻<sup>ね</sup>子<sup>ぢ</sup>見え<sup>ず</sup>

帰省子に自動改札となりし駅

しばらくは蛍包みし掌のにほふ

爪痛き記憶のありし御輿足袋

這ひ咲きに終り朝顔小さかり

短夜や空閨などと今さらに

明易し顎のせて枕しめりゐる



じいと鳴く蝉それきりの朝ぐもり

出てすこし胸張るこころ炎天下

言ひかけて飲み込む咽のんど喉ど墓ひきがえる

百合の束解かれ反そむくは反き合ひ

熱帯夜いつ目覚めても我がゐて

ごきぶりを打ち損じたる余力かな

白上布一夏一度に終りけり

ひきがえる  
墓跳ぶきつかけをはかりゐる

真裸を叩いて強気はしりけり

大牧広著『能村登四郎の世界』

若き日の登四郎のゐる涼夜の書

風呂の湯を落す匂ひも夜涼にて

団樂にときをり応ふ端居より

遠花火ときをり塔を映し出す

も一人の我を踊の中に見つ

八十路過ぎ露の齡ぞありのまま

秋白地着て晩年を長くをり



秋冷や何かの声に身を正す

今年米たしかな杓し文や字も触じりかな

夜の秋とる火に掛けて小海老など

臆する子前に押し出す地藏盆

鯉ふたつ巴とめぐる良夜かな

小望月出しほの船の座にありて

みやこどり良夜の船を慕ひくる

切れ字とは露一粒の厚みとも

見るべきは見て来しといふ生身魂

盆燈に引きしコードの見えがくれ

二三度を使ひしのみに秋扇

片下りなるシーソーの露まみれ

秋 蝉の遠く水湧く声に似て

未だ泳ぐ人数へをり秋の海

夜振人らし最終のバス降りし

落鮎にふるべき塩を手に残す



晴れの日を乏しく終へし在祭

晩菊やさりげなくして光る芸

年々に旅の減りゆく渡り鳥

どうしても割れぬ胡桃を前にして

萩

寒き夜の河豚食べし血の疼きあり

青海島船遊

巖避けて船危しや神渡し

香月泰男記念館

すさまじさの奥のやさしさ絵にこめて

津和野

町を貫<sup>ぬ</sup>く秋水の勢に余りあり

森林太郎墓とのみあり露けしや

枯景色くもり眼鏡に見るごとく

水の上を舞ふ綿虫の綿厚し

せめてもの湯気立たせけり独り部屋

冬立ちてことさら松の青勢ふ

零といふ無限の数や氷柱折れ

風邪声のふとなまめくに似たりけり

風呂吹に箸を刺しての思ひごと



襖張り下張り剥がし何もなし

蕎麦湯飲みわが血も淡くなりしかな

貧乏ゆすりしてをり風邪の兆しをり

湯豆腐や酒中の約の覚束な

畦の犬に時に声かけ蓮根掘り

火事やみしといふ人声の帰りくる

大噓せり寂しさの吹つ飛べり

凍鶴の眼の瞳みひらきてをりにけり

凍鶴と見えはた老鶴とも思ふ

橋なかばにて逝く年と思ひけり

懶

春

平成八年

去年今年とて倦みもせず我ありて

葛飾は霜に芦伏す初景色

賀状書く羞ひもあり生き過ぎて

飾掛くためのみにある釘古ぶ



赫々と日の射す方を恵方とす

豊穰の福藁なりや厚く敷く

春暁の何か始まる匂ひせり

はじめての耕しの鋤尊べり

葱の香の後さびしさも流れくる

大榾火ささりし釘も透きとほり

らしからぬ話題にながれ炉辺話

まつ先に病者が知れり雪の音

寒牡丹息が湿らす菰の中

忘れられてゐる水餅に似たるかな

雪吊のゆるみの時と思ひけり

ほしいまま朝寝の時をもちし幸

長湯して夜の臍を濃くしたり

寒の鯉描く薄墨を塗りかさね

猫やなぎ思つてもなき雨後の艶

涅槃図を掛ける太釘かと思ふ



乗り合せ受験子らしき眼の寒さ

風邪臉熱くて人を拒みけり

芦焼くや風向き変わる火を休め

小暮青風さん

同齡の死に遭ふ日よりもどり寒

セーターの毛玉ふやして老懶か

浴室に朧の夜気を少し入れ

先をゆく犬見失ふ春の暮

北村仁子さんの死

春疾風掌中の珠奪ひ去る

人肌色の御像が見たき涅槃かな

朝寝してまざまざと老残りけり

蛤汁はまつゆのほどの濁りのよかりけり

さくら見るためひた走る宇陀の闇

花に花重ねし贅の中にをり

花あまた見し夜の瞼熱もてり

花過ぎてひたひたと老迫りくる

鳥の恋砂場の砂の上乾き



けぶらひて木の芽起しの雨といふ

まつ先に初蝶見しをなぜか秘め

節句前の桜餅とて賞美せり

雛市に時費して悔もなし

店奥に手焙とゐる老雛師

枝々に雨意ありありと芽吹時

起す人なき朝寝なりあはれとも

余寒かな橋下の水の滞り

明日への信いくらありて種子を蒔く

青き踏みぬる老人のスニ―カ―

春一番老の強気を叱しけり

亀鳴くを欠伸を噛みし時間けり

春愁に似て非なるもの老愁は

飯蛸の糶場の隅に忘れられ

花  
疲  
れ  
せ  
る  
に  
さ  
そ  
は  
れ  
半  
歌  
仙

木  
蓮  
の  
生  
毛  
蒼  
や  
暁  
の  
雨



ひそやかに手早く雛のしまはるる

身をなめてゐて恋猫に加はらず

逃げ水を追はむこころの今もあり

遅ざくら一つ飛び地の札所寺

まだ開き惜しみのときの白牡丹

仁子逝き春逝く多摩の水の色

懶春や痒きにとどく鴟の嘴

白墨の円地に描きて春逝かす

近づいて見て白藤でなかりけり

蜆売一顆こぼさず量り終ふ

屋根濡れて北九州市明易き

青葉潮和<sup>め</sup>布<sup>か</sup>刈<sup>り</sup>の宮を押し狭め

早鞆の灘五月潮向き変わる

鷗外居思はぬ長き端居して

繭咲いて久女の遺墨蔵す寺

身のうちに蛩棲む闇あらまほし



その高さ風道として朴咲けり

夕虹やよきことありし日の終り

京瓦てふ美しきもの朝焼す

さがしゐし蚊取香出づかくれ部屋

倅かてんたう虫を指に止め

奈落より戻りしごとき昼寢覚

玉虫の出てきし時代物箏笥

藤本安騎生さん

吉野の鮎食べ老の血も香りけり

凌霄花したたか浴びし朝霰

蛩袋うなだれ咲きの雨を呼ぶ

星満つる大往生  
死送り来て

しばらくは長昼寝  
せし悔の中

朝 鴉 の 一 喝 に 醒 む 身 の 弱 り

ほ う と 息 つ け ば 秋 草 秋 の 雲

聲の出の俄によくて雲は秋

螢籠越しに触れたる人の息



葛の花葉裏より穂をもたげたる

北上山系影かさねつつ秋澄めり

賢治の地今豊穰の稲はぜて

久に触れし句碑や早池峯も秋の色

や  
や  
赤く  
縦の  
梢に  
夜鷹  
星

銀  
河  
鉄  
道  
疾  
走  
の  
後  
の  
星  
し  
ぶ  
き

諏訪

御柱街道炎天の下ひたつづく

諏訪の湖神意そのまま秋澄めり

踏み入つて諏訪路は芒・吾亦紅

木落し坂覗く危ふさ葛の蔓

大方の神は旅せり海の風

留守居せる神もあらむか岬の祠

海小春ときどき見えて兎波

冬なしの安房の蛭にも冬仕度

石 踏 咲 いて 海 へ 降 り ゆ く 蛩 の 露 地

菱川師信の「見返り美人」を見る

ゆ く 秋 を 女 見 送 る 姿 か も



申し訳ほど疎まばらなる翳雲

なくもがなの敬老の日に在りあはす

坂巻純子逝く

露の夜のこよなき弟子を見送りし

薄日射してより白鳥の花ひらく

冬帽買ひ旅の先々見えがくれ

遠火事に深き酔ひ寝の起さるる

数へ日や数へなほして誤たず

シーズンに煤逃げめきて坐りをり

凍蝶を見しそれよりの夕早し

春に仁子逝き冬純子を喪ふ

双翼をもがれし年を逝かしむる

忘れたき年なればとて年忘れ

芒  
種

平成九年

初筆の金短冊の墨をはね

蓬菜のあたらしき日呼び入れし



年酒の座つくづく膝のうすきかな

銀無地の屏風をひらく淑気かな

小松原朝の霽這ふ初景色

わが家紋食積の蓋に見出しけり

福藁を貰ひすぎたる嬉しさよ

大旦那り枕ばなれも常ならず

一月五日はわが誕生日

賜りし八十六歳初明り

今更の初鏡なれどまざまざと

松多き町に住み古り初霞

鏡餅生き残りめく家長の座

瘦身にして初湯をあふれさす

福藁を踏みたしかめて今年もよし

裏絵よき羽子板とし秘蔵せり

紀の国の蜜柑となりしてん手鞠

毛氈紅き棧敷賜る初芝居

遠風や矢切の空に浮き沈み



屠蘇の座や織田木瓜を家紋とす

加賀ぶりも年々薄れ雑煮膳

箸紙に名を書く役を今年また

着る時の羽織裏鳴る淑気かな

あけぼのの色とも見えて花びら餅

今はもう敵なき齡破魔矢受く

毘沙門で別れし連れや福詣

人日も過ぎし思ひの葱きざむ

息すこし遠ざけて見る寒牡丹

水餅を幾つ沈めし安堵かな

去年よりも肥えたるこち初湯出て

凍て瀧のゆるみの音のかくれなき

枯山の何見しリフト戻りくる

夜気にやや朧はじまる匂ひせり

薬食ひ火がなでまはる鍋の尻

やや肥えて藁うばひ合ふ寒雀



ひともがきして凍鶴の凍てを解く

すぐ去りし初蝶にして忘れ得ず

川幅のいくばくふとり二月尽

林ゆき芽吹き湿りと思ひけり

ぬるみたる水と思へどつめたけれ

二月てふ何もなき月住みよかり

一冬を越えて吾あり五体あり

草芽吹く老いには老いの身の置処

雨を無視して山焼の始まりぬ

山火事の消え際といふ来合せり

耕すや土をいたはる鋤さばき

水ふふむ重たさ貰ふ寒蜷

田の氷罅はしる音に踏みけり

母・妻を詠みしは昔わすれ雪

いつか失せたる麦踏のひとりかな

零といふ無限を追ひて蝌蚪およぐ



通されて雛の間までの間取よき

耳みみ朶たぶのやはらかきこと恃む春

うららかな長居の客のごとく生き

胸ふかく悪霊そだつさくらの夜

米櫃を春愁の手がならしけり

空腹の霞を少しづつつ吸へり

遍路ゆく旅なかばなる死もあらむ

逃げ水を追ふこと曾てしたりけり

恋猫のひそみて闇の艶めける

東吉野寶藏寺しだれ桜句碑開眼

花充ちて祝ぎの刻まつ句碑しづか

花時の石鼎旧居竈冷ゆ

石鼎の花冷衣吊しあり

残花追ふ旅となりけり伊賀名張

花時の疲れ尾を曳く旅のあと

川筋に住むゆゑ臙庭にくる

摘み草や膝に感じて地の鼓動



春の暮誰もゆるやか家路の歩

遅ざくら生地谷中の名を今も

余花の旅終へて昨日を遠くせり

地に落ちて兜に似たり肥後椿

一辯を引きて牡丹を崩れさす

暮春なる月島もんじや焼き通り

万愚節つきたる嘘のありやなし

朴咲けり不<sup>ふ</sup>壊<sup>ゑ</sup>の宝珠の朴咲けり

自分さがしの旅もあらむや遍路行

花すべて散りたる後の熟うまい睡いかな

白椿落ち際の錆まとひそめ

筆持てば文字が寄せくる春騒夜

頭を振つて脳たしかむる朧の夜

似たれども吾の筈なき遍路かな

植ゑし苗根付きゆくさましづかなり

木の芽時歩けと杖を贈らるる



土筆の茎人肌いろに透きとほり

みつみつの夜桜鬼気を醸したる

牡丹や夕冷え時の身のしまり

長く長く剥かれし露の糸ちぢむ

人肌に桜じめりといふがあり

牡丹の今充電の時とおもふ

俳句てふ自作自演やさくら時

改札の切符とび出す春の暮

桐の筒花拾ひて花の高さ知る

菖蒲時明治男を誇りもし

杉の間に伊賀ぶりといふ幟立つ

藤房の先の重りや雨しづく

水張りてより田の空のくもり癖

水原春郎さん

涙ぐましきまでに師に似し暮春かな

更衣へて老の構へのおのづから

白靴を穿くためらひの今もあり



掌に宇宙も掴み蟻も掴む

はるかなる祭囃子に腰浮けり

つかの間の若さありけり白地着て

暁の冷えあり朴の花しづく

ゆつくりと息づく雨後の螢火は

何となく祭近づく町の色

人の泳ぎ見てゐて心泳ぐ型

金魚鉢にてわが顔の歪み知る

噂とびすぐ消え梅雨のひとつ蝶

父母の声さすがに忘れ更衣

降りし後まだ雨気のこす菖蒲の芽

雄心や直立こぞる松の芯

青梅雨や流木に知るものゝ果て

## 後記

『芒種』は『易水』後三百五十句をまとめた第十三句集である。今はこれと言って病はないが何と言っても八十八歳の老躯はしんどい。

そんな中で毎月の作品を発表しなければならぬのは辛い。しかし考えを替えると老いてもこのような仕事を持っていることは男として倅なことだと思っている。

『芒種』とは二十四気の一つで六月六日のこと、「のぎ」のある穀物を播く時期ということで何となく好きなことばなのでつけた。

平成十一年八月 八十八歳 夏

能村登四郎



発行 一九九九年十二月二〇日初版発行  
著者 能村登四郎  
発行人 山岡喜美子  
発行所 ふらんす堂

句集

芒種

(ぼっしゅ)